

沖永良部島和泊町手々知名の遊び踊り

く ま だ ^(注1)
久 万 田 すすむ 晋

概 観

鹿児島県大島郡和泊町手々知名集落には、「遊び踊り（あしびうどらい）」という女性を中心とした集団の太鼓踊り芸能が伝えられている。これは奄美大島、喜界島、徳之島に分布する八月踊り、七月踊り、夏日踊り等と共通する^(注2)集団による太鼓踊りの芸能として貴重なものである。筆者は1991年春にこの手々知名の遊び踊りを見学する機会を得たので、ここに芸能を報告することにする。^(注3)遊び踊りに関してはすでにいくつかの論考や資料報告が出ているが、^(注4)今回はそれらを参考にしつつ筆者の調査でえられた資料を中心として報告したい。

鹿児島県奄美諸島に位置する沖永良部島は、島全体が琉球石灰岩による平坦な段丘地形でできている。そのため奄美諸島の中でも耕地面積において恵まれており、農業が盛んな島である。主にサトウキビ、花卉栽培などが中心となっている。遊び踊りを伝承している手々知名は集落沖永良部島和泊町の役場所在地である和泊の東側に隣接する集落で、人口は平成6年現在で783人となっている。

手々知名の遊び踊りは、現在沖永良部島では手々知名だけに伝承されている貴重な芸能である。『和泊町誌民俗編』によれば、かつては町内の玉城字にもあったということだが、現在は絶えている。^(注5)

遊び踊りは現在では様々な機会に舞台上で踊るものとなっているが、かつてはトーと呼ばれる戸外の広場や浜で演じられる踊りであった。かつての踊りの機会としては、旧暦七月の盆の十五日、八月十五夜の夜、そして十月十五日のウミリ行事などであった。

八月十五夜には、南洲神社で昼間は子供達の奉納相撲が行われた。夜には月見の宴が催され、その中で遊び踊りも行われた。^(注6)

十月十五日のウミリには、サツマイモ、ミズイモ、グジマメ、タイモなどを

吹き合わせて（これをタチョーシャという）、これを神さまに供える意味で手々知名の前の長浜に持っていき、食べて楽しんだ。その頃は気候的にはかなり寒くなっているのです、はんてんなどを着て浜に出た。その機会に浜で遊び踊りも踊られた。

これらの機会には、ふだん門限が厳しい若い女性達も、この時ばかりは夜まで踊ることを許されて楽しんだという。踊りは夜の2時、3時くらいまで行われた。もっぱら女性が中心で、男性は踊りの輪の回りに座って鑑賞していたが、中には踊り好きな男性が四人五人と太鼓を叩いたり、一緒に輪の中に混じって踊ったという。現在も太鼓は男性に頼むということである。

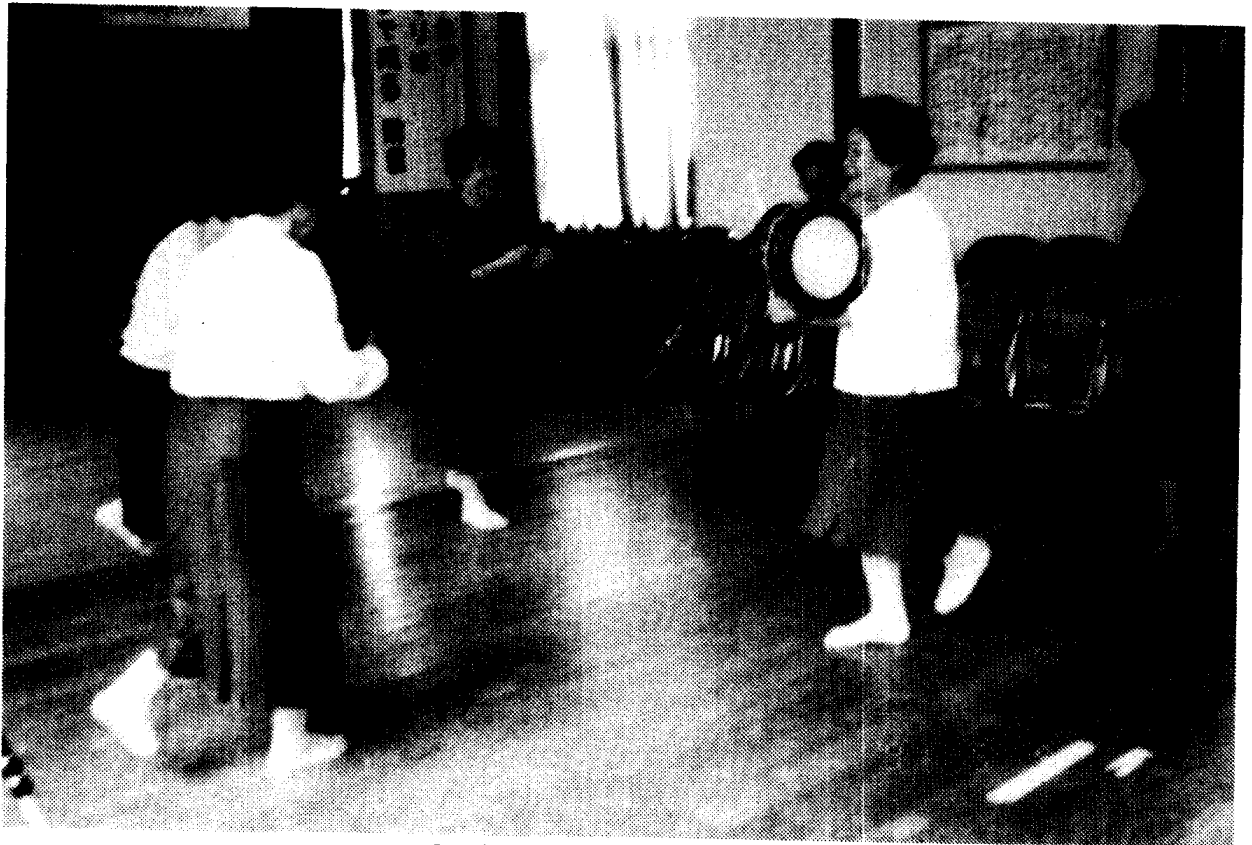
昭和42年4月10日に手々知名の遊び踊りとして和泊町無形文化財の指定を受けている。

手々知名の遊び踊りは現在4曲を伝承しているが、明治の頃から存続の危機を迎えていたようである。沖永良部島には明治以降沖縄から芝居の一座が興行に訪れたり、琉球舞踊が流行り、^(注7)それとともにこの遊び踊りもだんだん衰退していったらしい。明治中頃までには遊び踊りの曲種は13曲ほどあったというが、その後廃れ、大正3年の大正天皇即位大典の記念祝賀会をきっかけとして復元されたと『和泊町誌』に記されている。^(注8)またこの時、玉江柳曹という南洲神社の神主をしていた人が遊び踊りの歌詞として「いろは歌」を編んだ。^(注9)これは教訓的、処世的色彩の濃いもので、大正天皇即位にちなんだ教育的意図があったものと推測される。またその玉江氏の母になる人がこの遊び踊りの振り付けをして、手々知名の人々に教えたという伝承もある。

現在の保存会の中心の方々は、町田カメ氏という踊りの達者な方に指導を受けたという。最近では、婦人達に教えるほかにも伝承のために、夏休みの朝に行われる神社の清掃の機会を利用して、子供達に踊りを少しずつ教えたりしているという。

奏演形態

現在の舞台上の奏演では、伴奏のテープを使い、テープの歌声に合わせてながら踊る。その場合、ハヤシ詞の部分は踊り手が踊りながら歌う。まず、テープ



手々知名遊び踊りの奏演風景

に入った太鼓の音に合わせて、太鼓役（男性3～4人）が先頭になって入場してくる。踊り手の女性がそれに続く。1曲目を歌いながら円陣を組み、輪になって踊りを繰り広げる。その際太鼓役の人は踊りの輪の真ん中に立つ。太鼓役も、足踏みは踊り手と同じで踊りながら叩く。太鼓はチヂンと呼ばれ直径約30cmの杵型両面締太鼓で、これを垂直に立て左手で下から支え、右手で長さ約30cm程のバチで叩く。

1曲目から4曲目まで間髪を入れずメドレー的に続けて踊り、退場の時は4曲目の〈シュンサミ〉の途中で円陣を解いて一列になり、踊り歌いながら退場する。

歌は掛け合いということではなく、何人かの太鼓のリズムに合わせて皆一緒に歌いながら踊るものであった。しかし戦後になって、歌いながら踊るというのでは息切れするということで、歌の上手な人を4、5人頼んで、その人達の歌に合わせて皆が踊った。その後、遊び踊りの歌を録音したレコードを使うようになり、さらにレコードからカセットテープに代わった。また、舞台化ということで、入場、退場などの隊列を工夫して全曲を続けてメドレー風に踊る

現在のやり方になってきた。

しかし現在でも、保存会の方々は歌はしっかり記憶されている。なぜテープ伴奏を使う必要があるのかという筆者の質問に対して、テープなどの伴奏なしで歌いながら踊ると、どうしてもオークチ（息切れ）してしまうから、ということであった。筆者らは、遊び踊りが沖縄奄美地域に広く分布する踊り歌の一環に位置付けられるものという考えから、保存会の方々に地謡方やテープを使わず自ら踊り歌う方法での奏演をお願いした。本論での旋律、舞踊採譜はこの記録資料によっている。

伝承曲について

ここでは手々知名の遊び踊りで伝承されている曲目についての若干の説明を記す。

これらは1991年5月5日手々知名公民館での手々知名遊び踊り保存会の方々による奏演の記録に基づいている。同記録に基づいて文末資料1に旋律・舞踊楽譜、資料2に演唱歌詞記録を作成した。舞踊譜に関しては奏演後の踊りのパターンの始まりや所作などについての説明を参考として作成した。舞踊譜は(注10)小林公江氏の開発した記譜法（通称鳴坂譜）によった。

演唱歌詞の対訳については、先行資料等を参考にした。(注4)

1. 〈でっしゅい〉

『永良部島民謡民舞 遊び踊り』では「手習い節」と記されている。元歌（歌い始めの歌詞）からとられた曲名であろう。『和泊町誌民俗編』では「手習い（ティッシュ）始め」とされているが、ここでは保存会の方々の呼び方に従った。

旋律は琉球音階、(注11)踊りの周期は7拍で、両手を下げるところがパターンの始まりである。その場合、先輩から「それ以上下に手を下げるな」と指導されたという。また脇を締めて踊るといふ。

この旋律は奄美から沖縄北部にかけて広く分布している。(注12)旋律は琉球音階となっているが、元歌の中にも「大和・・」が出てくる地域が多いことから、日

本本土から伝播した旋律と考える研究者が多い。小林公江氏はこの旋律に関して屋久島、奄美から沖縄本島までの分布をもとに比較譜を作成している。^(注13) これを見ると音階の違いを差し引いても、旋律線では奄美大島徳之島よりも沖縄本島（たとえば国頭村安波や名護市汀間）のものにより近いようである。これだけ広い分布域を持つ旋律において、このことが沖縄から手々知名への伝播、もしくは沖永良部から沖縄への直接的伝播を示すかどうかは今後舞踊の構造比較も含めて考えねばならないが、留意しておきたい点である。なお手々知名のものは、他のほとんどの地域の旋律が持っている「ウマ（クマ）デンス（シュ）ナ」というハヤシ詞を欠いている。

2. 〈チェンチェン〉

この曲は『永良部島民謡民舞 遊び踊り』では「ちんてぬ節」と表記されているのが、『和泊町誌民俗編』では「ちくんてぬ節」と改められている。前者においてもハヤシ詞が現在実際に歌われている形とほぼ同じなので、同曲と考えてよいだろう。今ではハヤシ詞からとった「チェンチェン」と呼ばれているようである。この演唱では1. 〈でっしゅい〉からの続きで、「いろは歌」の歌詞によって歌われたので、両資料に載っている元歌は歌われていない。

旋律は琉球音階で、三度堆積的な傾向を示す。踊りの周期は18拍で、手を叩くところがパターンの始まりである。「うちこみ」といわれる13拍目の動作は手を下げて、動作を大きく、足を高く上げて踊れと昔の年寄りに教えられたという。この「うちこみ」という動作は次の〈どんどん節〉にも出てくるが、昔の人は両手を右肩の後ろからをもってきて大きく前に投げ出していたが、最近の人はそういう大きな動作をしなくなったという。またこれは他の曲よりテンポを少し速く踊るため「走る踊り」といわれていた。

この曲はたいへん特徴的なハヤシ詞から、〈ちくてん節〉〈ちくてんぐわ〉などと呼ばれ種子島から奄美沖縄まで広く分布する曲種の一系統と思われる。この曲についても小林公江氏が他地域との比較を試みており、^(注14) 種子島南種子町平山、手々知名、沖縄本島国頭村奥の三種を比較譜化している。他資料では『日本民謡大観（沖縄奄美）奄美諸島篇』に収録された奄美大島宇検村部連の〈しとてんぐわ〉^(注15) も同系であろう。これらを見てみると、小林氏の比較した三種が

旋律構造的には類似しており、特に同じ琉球音階である点でも手々知名のものは奥（〈巡り節〉）ともっとも類似しているようである。部連のものは旋律一節で琉歌形式の歌詞が半句しか歌われない点が異なる。筆者も前にこの系統の旋律を採集報告しているが部連のものと同様の構造であり、奄美大島におけるこの曲種が独特の構造を見せているらしいことは注意を要する。前の〈でっしゅい〉と同様、沖縄から伝播したのか、もしくは北から沖永良部を経て沖縄に伝わったのか今のところは決めがたいが、奥の旋律との類似性は注目しておくべきであろう。

3. 〈どんどん節〉

『永良部島民謡民舞 遊び踊り』では元歌に続いて7775形の歌詞が載せられているが、この演唱では2節以降は「いろは歌」の歌詞が歌われた。かつてこの曲が伝来した時には大和風の7775の歌詞を伴っていたのであろうか。旋律は、他の曲がいずれも琉球音階である中で、この曲のみが律音階である。これらはこの旋律が北から伝播してきたことを示しているのかもしれない。この曲は種下ろし行事における餅貫い歌（道行き歌）として奄美中に広まっている。また八月踊りの中や、諸鈍芝居でも歌われている。^(注17)

踊りの周期は12拍で、手を叩くところがパターンの始まりである。昔の人は「うちこみ」の動作（7拍目）の前に、胸前で両手平を上に向け、交互に内側に上下に回すようにしていたが、今の保存会の方々を指導したお年寄りから「それは良くない」といわれ、両手をそのまま揃えて上げてから「うちこみ」をするように踊り方を改めたという。

4. 〈シュンサミ〉

『永良部島民謡民舞 遊び踊り』によると、この4曲目は〈作たぬ米〉となっており、現在歌われている〈シュンサミ〉とはハヤシ詞が異なっている。保存会の方々はこの旋律のハヤシ詞である〈シュンサミ〉という名で認識している。あるいはかつて別に行われていた曲の伝承がこの資料に残っているのであろうか。『和泊町誌民俗編』では曲名は〈作たぬ米〉となっているが、歌詞中のハヤシ詞は現在歌われている〈シュンサミ〉と同じものになっている。伝承

と資料との不一致を勘案した上での訂正であろう。両資料とも元歌は「今年作たる米は しーし玉ぬないしゅさ」というものである。しかしこの演唱では、やはり「いろは歌」の歌詞によって歌われた。

旋律は琉球音階で、三度堆積的な傾向を示す。踊りは周期10拍で、手を叩くところがパターンの始まりである。現在の舞台上での奏演ではこの曲が遊び踊りの最後に踊られる。その時には曲の後半で踊りの6～9拍目のパターンを繰り返し、ハヤシ詞の「シュンサミシュンサミ」を繰り返し歌いながら円陣から一列になり、退場してゆく。

沖永良部島の知名町上平川集落には〈シュンサミ〉という歌がある。同集落^(注18)伝承の「蛇踊り」の最後に総踊りとして歌われるようである。これはハヤシ詞も同じく「シュンサミシュンサミ」というものであり、同系統の旋律と考えられる。また沖縄本島の大宜味村饒波の七月イェンサーにある〈スンサミ〉と^(注19)いう曲の旋律・舞踊譜が小林幸男により報告されている。さらに沖縄本島には^(注20)「作たる米(メー)」、「スンサミ」と呼ばれる踊りが数ヶ所にある。沖永良部島以北の奄美には、管見の限りこの系統(ハヤシ詞「シュンサミ」をもつ)の旋律は見られない。旋律に関しては、沖縄本島から沖永良部島に伝わったと見て良いのではないか。今後さらに舞踊的観点からこうした芸能的広がりの中で位置付けを考える必要がある。

考 察

本論は手々知名の遊び踊りの芸能報告であり、他地域の関連芸能との緻密な比較考察は行えないが、今後に向けていくつかの点に関して気づかれることを指摘しておきたい。

第一に手々知名の遊び踊りは、伝承されているいずれの曲の奏演においても以下のような奏演構造の特徴をもっていることが分かる。

- 現在は踊りの伴奏にテープを使用することが習慣となっているが、本来は踊り手が自ら歌い踊る芸能であった。
- 8886の琉歌形式の歌詞を有節形式の旋律^(注21)によって歌う。
- 踊りのパターンは曲ごとに拍周期を持っていて、そのパターンを繰り返し

て踊る。

- 踊りの拍周期は旋律の拍周期（旋律が繰り返される周期）とは無関係に並行的に進行する。

以上から、手々知名の遊び踊りは、集団による太鼓踊りの芸能として、奄美大島、徳之島、喜界島に伝わる八月踊りと同種の構造をもつといえる。さらに、沖縄本島の女性舞踊ウシデークとも共通している。ただし沖永良部島以北のものが、男女集団間の歌の掛け合いで演唱されるのに対し、手々知名の遊び踊りは女性中心で歌い踊られる点で、沖縄のウシデークとより近い姿を示している。ただしそれのみからは、八月踊りよりもウシデークと成立において深い関係をもつとすぐに断定はできない。今回は踊りの要素を他地域と比較しての分析は行えなかったが、筆者の見る限り、奄美大島、徳之島の八月踊り等とも共通の振りの動作をもっている。今後は八月踊りと沖縄のウシデークの両者と舞踊構造を比較し類縁関係を明らかにしてゆく必要がある。旋律の上では、各曲とも南の沖縄本島と奄美諸島の沖永良部以北の島々の両地域あるいはどちらかに分布しているものであり、決して遊び踊りが孤立的にあるのではなく、旋律伝播の広がりの中で遊び踊りの位置づけを行うべきことを示している。また以下にも述べるように、現在伝承されている曲が昔からそのまま受け継がれてきたとする前に、部分的な改編を経た可能性を考えねばならない。

第二に遊び踊りは近代以降においても、盛衰にともなう芸態の変化を経てきた点である。本来の遊び踊りは、人々が集団で歌い踊る踊り歌であったはずである。しかし奄美大島や徳之島の八月踊りと違って、かなり早い時期から踊りと歌の分化が試みられたようである。つまり全員が踊りながら歌う形から、踊りの輪から独立した地謡の演唱に合わせて一同が踊る形になり、さらには生の地謡の代わりにレコードやテープを使うまでに芸態が変化してきているのである。ただし筆者の見学時には、今回の記録に示したごとく保存会の方々にはテープを使わずに歌い踊っていただいた。本来の踊り歌としての芸態は今でも伝承されているのである。ともあれこうした奏演形態の変化は、あるいは新取の精神に富む沖永良部島の人々の気質が芸能の上に表現された結果とも受け取れる。

前に紹介した、大正初めに「いろは歌」を編んだといわれる玉江柳曹翁の母

にあたる人が、踊りを振り付けして手々知名の人々に教えたという伝承は、そのとき遊び踊りが創作されたということを示しているのであろうか。しかし一方では大正御大典までは13種類ほどの曲種があったという記録もある。^(注22)おそらくそれ以前から盛衰はあったにせよ遊び踊りは存在しており、それらは奄美大島、徳之島の八月踊り等と様式的共通性をもったものであった。大正当時復興的気運が盛り上り、以前の様式をもととして芸態に改革が加えられたことがこの伝承に表現されたと考える方が妥当と思われる。「いろは歌」の編成も、そうした芸能改革の一環と見なせるだろう。ならば現存の4曲はいつ成立したのだろうか。この大正頃の改革時に他地域（沖縄や奄美大島、徳之島など）の芸能からこれらの曲を取ってきて始まったとも考えられる。しかし『永良部島民謡民舞 遊び踊り』には現存4曲について、今では「いろは歌」にとって変わられあまり歌われていない歌詞も掲載されている。これらは「いろは歌」が編まれる以前から伝わっていたものであろう。この中には特に各曲の元歌など、奄美他地域と共通のものもあり、遊び踊りの旋律が手々知名へ伝播した当初から旋律と共に伝わってきた可能性が強い。とすれば現存曲も何らかの改編は経たにせよ、大正初期以前から遊び踊りのレパートリーとして存在していたと考える方が無難であろう。

注

注1 沖縄県立芸術大学附属研究所講師。

注2 これらを以下、八月踊りの名称で一括する。

注3 1991年5月5日、筆者は東京芸術大学民族音楽ゼミナール（代表：小柴はるみ（東海大学教授））の一行と共に、和泊町手々知名公民館において手々知名遊び踊り保存会（会長：谷元義男氏）の方々による遊び踊りの演奏を見学することができた。

注4 『和泊町誌民俗編』（鹿児島県和泊町教育委員会、1984）、仲宗根幸市「手々知名の遊び踊り」（『まつり』34、錦正社、1982）には遊び踊りの芸態が紹介されている。歌詞資料としては、『永良部島民謡民舞 遊び踊り』（手々知名遊び踊り保存会編、謄写版）がある。この資料中に保存会の結成が昭和37年10月1日とあるので、それ以降に作成されたものであろう。『南島歌謡大成Ⅴ 奄美篇』（角川書

店、1981)には、対訳付きでこれを元にしたと思われる歌詞が紹介されている。また『和泊町誌民俗編』にもこれに加筆修正を加えたものが出ている。音源(レコード)としては、『奄美沖永良部民謡傑作集(改訂版)』(セントラル楽器)、『沖之永良部民謡集』(2枚組、大村隆二制作、1971)がある。楽譜資料としては『日本民謡大観(沖縄奄美)奄美諸島篇』(日本放送出版協会、1993)に〈チェンチェン〉と〈手習い節〉二曲の楽譜が収録されている。

注5 『和泊町誌民俗編』p.922。

注6 さらに以前は相撲や遊び踊りも長浜で行われたという。

注7 松原武実「沖永良部島の芸能」(『南日本文化』23、1990)にはこうした沖縄芝居の興行や琉球舞踊の浸透の様子が詳しく述べられている。

注8 『和泊町誌民俗編』p.910。

注9 一説には玉江柳曹翁と平瀬(旧姓門松)覚熊翁の共作であるという手々知名の伝承がある。『和泊町誌民俗編』p.910。

注10 この記譜法については久万田晋・寺内直子「奄美大島龍郷町秋名の八月踊り」(『沖縄芸術の科学』5、1992)の舞踊採譜凡例を参照されたい。

注11 音階については「南西諸島の音楽文化概観」(『日本民謡大観(沖縄奄美)奄美諸島篇』p.7~14)参照。

注12 奄美諸島におけるこの系統の分布に関する研究としては内田るり子「「八月踊り」の地域性—「でっしょ」をめぐる—」(『沖縄の歌謡と音楽』第一書房、1989)、小林公江「ウンデークの中の大和性を探る」(『南西諸島の音楽芸能における文化複合の総合的研究—平成5年度科学研究費補助金研究成果報告書』金城厚編、沖縄県立芸術大学、1994、p.56)がある。

注13 小林公江、同上p.56。

注14 小林公江、同上p.56。

注15 『日本民謡大観(沖縄奄美)奄美諸島篇』。奄美大島の八月踊りにおいてこの曲は広い地域に存在している。

注16 久万田晋「奄美大島笠利町城前田の八月踊り歌」(『沖縄芸術の科学』4、1991)p.42〈ヒヤルガヨイソレ〉参照。

注17 小川学夫は『奄美民謡誌』(法政大学出版局、1979)において奄美の〈どんどん節〉の系譜研究を行っている(同書p.275)。

- 注18 『知名町誌』（鹿児島県大島郡知名町役場、1982）p.998。なお、筆者は手々知名の遊び踊り見学の前日、上平川公民館にてこの踊りも見学したが、その踊りは手々知名の〈ジュンサミ〉よりかなり複雑で、沖縄本島北部の七月舞（女エイサー）を思わせる様式であった。蛇踊りに関しては、清村杜夫「蛇踊りの音楽…知名町上平川（古地名・ヒョウ）」（『奄美郷土研究会報』28、1988）参照。
- 注19 小林幸男「沖縄本島北部の七月舞（その1）—大宜味村鏡波の七月イェンサー—」（『鹿児島短期大学紀要』25、1980）p.71。また小林幸男の研究によると、これと同系の旋律は大宜味村内の大宜味、根路銘にもあり、古典音楽の〈作たる米節〉と同系という。小林幸男「沖縄本島女エイサーの音階」（『諸民族の音 小泉文夫先生追悼論文集』音楽之友社、1986）比較曲目表参照。
- 注20 たとえば『琉球芸能事典』（那覇出版社、1992）p.59には、読谷村長浜の「チクタルメー」という踊りが紹介されている。
- 注21 定型のあるメロディーが何回か繰り返されて歌われるような様式。その場合、旋律に当てはめられる歌詞は決まった音数律形式をもつ場合が多い。沖縄、奄美では8886の琉歌形式が優勢である。
- 注22 『和泊町誌民俗編』p.923。

資料1 旋律・舞踊楽譜

1. <でっしゅい> 実音は短6度下



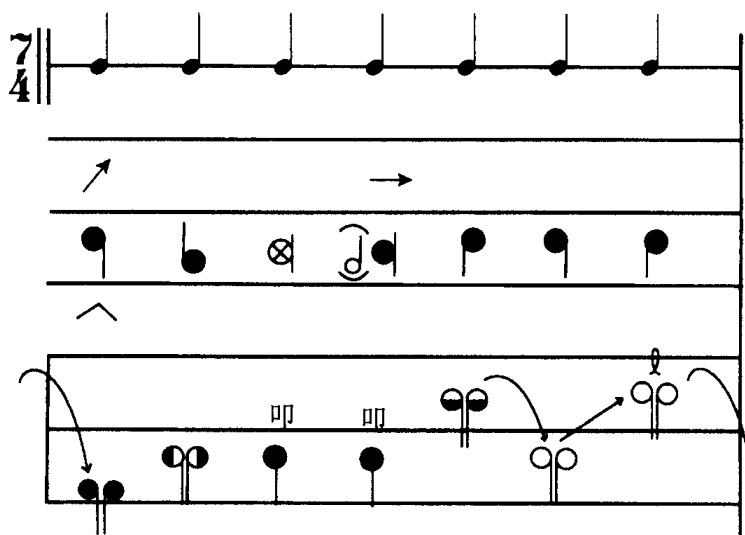
1. → でっしゅい はじゅみた ちーた がはじゅーみ がねーや ソレ
 2. いきち うるゑだぬーゆ ぬなかーゆ とうむーていソレ
 3. ろーそくぬあかりーしんからーどうていらーす ソレ
- (以下略)



1. むーかし ちゅうとうじゃぬー はじゅみたーちゃむ ソレ
2. あーとうぬ ゆーにぬくるー さたやちゃーすが ソレ
3. すーとうや なーがりていむー くるひーかていソレ

踊りは周期7拍 反時計回り

このパターンで踊りながら一列で入場し、輪を作ってゆく。



2. <チェンチェン> 実音は短6度下

$\bullet = ca.122$

1. に し き い --とう -- ぎ ぬ - - や ヨ -
 2. ほ た る あ --ち -- み てい - - どう ヨ -
 (以下略)

掛け声

1. す と う が わ - ぬ か - ざ り - ヒヤル ヒヤ ルイ [チャースガ
 2. す ぐ り む - ぬ な - た る - ヒヤル ヒヤ ルイ [チャースガ

1. ヒヤールイ] く くる み -- が -- ちゆ し - - - どう
 2. ヒヤールイ] ら んぶ ひ -- る -- な ちゆ - - - てい

1. ヨ - - ひ - とう ぬ - ね - - む - ち
 2. ヨ - - ゆ - だ ん - す - - る - な

※

1. チェ ン チェ ン ヨーチェン チェ ン シタリガ チェン チェン ヨーチェン チェン
 2. チェ ン チェ ン ヨーチェン チェ ン シタリガ チェン チェン ヨーチェン チェン

※ 演唱の際、第1節に先だつてここから歌い始められた。

踊りは周期18拍 時計回り

18
4

叩 叩 叩

3. <どんどん^{おし}節> 実音は短7度下



1. く とうし どん どん おし — やま とう —ぬ は — や い
 2. い きち うー るゑえだぬ — ゆぬ な かゆ とう む てい
 3. ろ — そ く— ぬあ かり — しん か らどうてい— ら す
- (以下略)

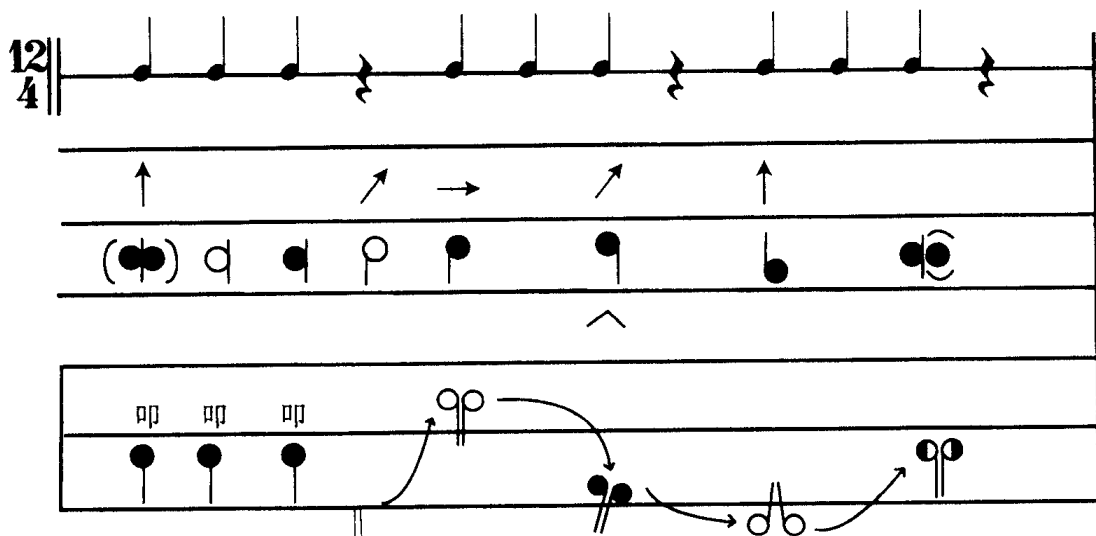


1. ナ [ソレ] や がてい み ちぬ し ま — — は や
2. ヨ [ソレ] あ とうぬ ゆ にぬ く る — — さ た
3. ヨ [ソレ] す とうや な がり てい む — — く く



1. い わたる ハラ ドンドン マ タ イ ト スガネ ソレ
2. や ちゃすが ハラ ドンドン マ タ イ ト スガネ ソレ
3. る ひかてい ハラ ドンドン マ タ イ ト スガネ ソレ

踊りは周期12拍 反時計回り



4. <シュンサミ> 実音は長6度下



1. いきち う るゑえ だーぬ ゆーぬ なーかーゆ
 2. ろーそ く ぬあ かーり しーんかーらーどう
 3. はじし ら ぬむ ぬーや うーまうーしーぬ
- (以下略)



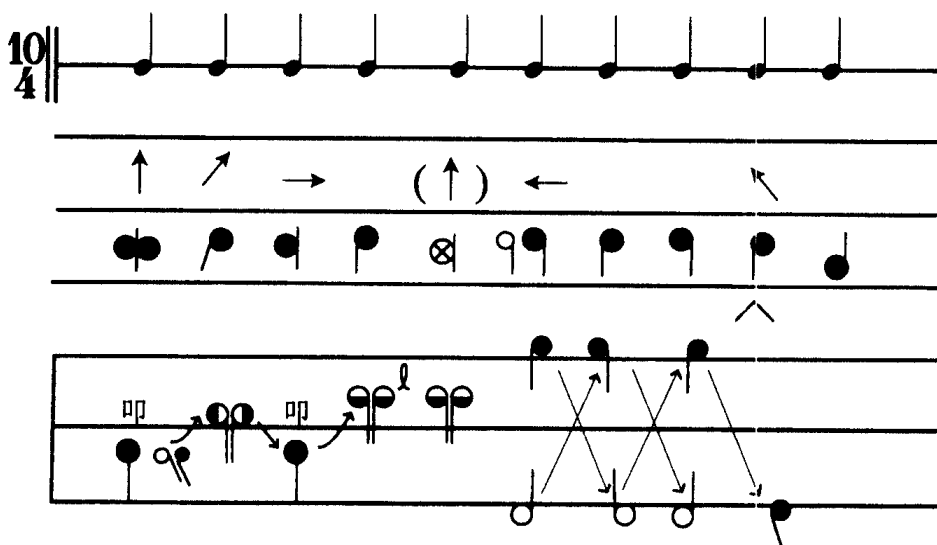
1. とーむ てい シュンサミ シュン サミ あとうぬ ゆ にぬ
2. ていーら す シュンサミ シュン サミ すとうや な がり
3. たーぐ い シュンサミ シュン サミ たとうい ひ とうな



1. くー る さーたやーちゃすが ちゃーすが シュンサミ シュンサミ
2. ていーむ くーくるーひかていひーかてい シュンサミ シュンサミ
3. みーぬ しーがたーあていむあーていむ シュンサミ シュンサミ

※ 退場の際は最後の2小節を繰り返しながら退場する。

踊りは周期10拍 時計回り



※ 退場の際はこのパターンの繰り返しで退場する。

資料2 演唱歌詞記録

- ・各曲二節以降のハヤシ詞は☆印で示した。[]内は掛け声。
- ・既出歌詞については歌意を略した。

1. <手習い>

1. 手習い^{でっし}始^{はじ}みたち 誰^たが始^{はじ}みがねや ソレ
昔^{ひかし}ちゅうらうとうじゃぬ 始^{はじ}みたち^むむ ソレ
(手習いを始めたのは誰が始めただろう 昔の美しい弟者が始めたという)
2. 生き^いちうる間^{あいだ}ぬ 世^よぬ中^{なか}ゆとう思^{おも}てい ☆ 後^{あと}ぬ世^よに^ぬく^る 沙汰^{さた}やち^やすが ☆
(生きている間の世の中と違って 後世に残る沙汰はどうするか)
3. 蠟燭^{ろうそく}ぬ明^あかり 芯^{しん}からどう照^{てい}らす ☆ 外^{すたう}や流^{なが}りてい^む 心^{くるみか}光^{てい} ☆
(蠟燭の明りは芯からこそ照らすのだ 外は流れても心は輝いて)
4. 恥^{はじし}知らぬ者^{むね}や 馬牛^{うまうし}ぬたぐい ☆ たとうい人^{ひと}並^なみぬ姿^{しや}あていん ☆
(恥を知らない者は馬牛と同類だ たとえ人並みの姿であっても)
5. 昔^{むかし}神代^{かみゆ}から 知^しちうたぬ手^{てい}振り ☆ 忘^{わし}りらぬ為^{ため}に知^しらに^やち^やすが ☆
(昔の神代から知っていた手振り 忘れないために知らなければどうするか)

2. <チェンチェン> 演唱時は2、3節の間にもう一節歌われたが演唱に乱れがあったので略した。

1. 錦糸^{にしさいとうぎぬ}絹^ぬや ヨ 外側^{すたうがわ}ぬ飾^{かざ}り ヒヤルヒヤルイ [チャスガヒヤルイ]
心^{くるみか}磨^がちゆしどう ヨ 人^{ひと}ぬ値^ね打^ひち
チェンチェンヨチェンチェンシタリガチェンチェンヨチェンチェン
(錦や糸の着物は外側の飾り 心を磨く人こそが人の値打ち)
2. 蛍^{はたるあち}集^あみていどう ヨ 優^{すぐ}り者^{むね}なたる ☆ ランプ^{ひる}昼^{ひる}なちゆてい ヨ 油断^{ゆだん}するな
(蛍を集め勉強して優れ者になったのだ ランプを灯し昼のようにして油断するな)
3. 昔^{むかし}神代^{かみゆ}から 知^しちうたぬ手^{てい}振り ☆ 忘^{わし}りらぬ為^{ため}に知^しらに^やち^やすが ☆

3. <どんどん節>

1. 今年^{くとし}どんどん節^{よし} 大和^{やまと}ぬ流行^{はやり} ナ [ソレ] やがて^{みち}い道^{しま}ぬ島^は 流行^はいわたる
ハラドンドンマタイトスガネ ソレ
(今年のどんどん節は大和の流行りだ やがて道の島に流行りわたる)
2. 生き^いちうる間^{あいだ}ぬ 世^よぬ中^{なか}ゆとう思^{おも}てい ヨ☆ 後^{あと}ぬ世^よに^{ぬく}残^{また}る 沙汰^{さた}やち^ちやすが ☆
3. 蠟燭^{ろうそく}ぬ明^あかり 芯^{しん}から^{どう}照^{てい}らす ヨ☆ 外^{すたう}や流^{なが}りていむ 心^{くるみか}光^{てい} ☆
4. 恥^{はじし}知らぬ者^{むね}や 馬^{うま}牛^{うし}ぬたぐい ヨ☆ たとうい人^{ひと}並^{なみ}みぬ姿^{しづ}あていむ ☆
5. 昔^{むかし}神^{かみ}代^{みよ}から 知^しちうたぬ手^{てい}振^まり ヨ☆ 忘^{わし}りらぬ為^{ため}に 知^しらに^ちやすが ☆

4. <シュンサミ>

1. 生き^いちうる間^{あいだ}ぬ 世^よぬ中^{なか}ゆとう思^{おも}てい シュンサミシュンサミ
後^{あと}ぬ世^よに^{ぬく}残^{また}る 沙汰^{さた}やち^ちやすが シュンサミシュンサミ
2. 蠟燭^{ろうそく}ぬ明^あかり 芯^{しん}から^{どう}照^{てい}らす ☆ 外^{すたう}や流^{なが}りていむ 心^{くるみか}光^{てい} ☆
3. 恥^{はじし}知らぬ者^{むね}や 馬^{うま}牛^{うし}ぬたぐい ☆ たとうい人^{ひと}並^{なみ}みぬ姿^{しづ}あていむ ☆
4. 錦糸^{にしきいと}絹^{ぎぬ}や 外^{すたう}側^{がわ}ぬ飾^{かざ}り ☆ 心^{くるみか}磨^がちゆしどう 人^{ひと}ぬ値^ね打^{うち} ☆
5. 昔^{むかし}神^{かみ}代^{みよ}から 知^しちうたぬ手^{てい}振^まり ☆ 忘^{わし}りらぬ為^{ため}に 知^しらに^ちやすが ☆